

新生児看護における感染管理

特集にあたって

「新生児にとっての最善につながる」感染管理

新型コロナウイルス感染症のパンデミック発生から5年目を迎え、日本では感染症法上の類型が5類感染症となり、1年が過ぎました。市中では、笑顔溢れる人々が、ポスト・コロナの世を満喫しているようにみえます。一方で、新型コロナウイルス感染症に限らず、さまざまな感染症の流行や集団発生が報じられています。医療機関では、ユニバーサル・マスクや面会時間の制限が続いています。

新生児看護において、感染管理は重要な課題です。新生児の免疫能は未成熟であり、在胎週数や出生後の日齢によって患者の感染リスクは刻々と変化します。また、侵襲的な医療器具の使用や手術などの処置に伴う感染リスクは、年々複雑かつ高度化しています。新生児看護においては、患児とユニットのもつ感染リスクをそれぞれ理解し、感染管理の手順を検討することが必要です。

本特集では、新生児における感染管理の基本的な知識や原則、ガイドラインなどで推奨されている感染防止技術、サーベイランスによる評価といった、実践に必須の知識について、それぞれ解説していただきました。また、新生児集中治療室(NICU)や産科新生児室における感染対策について、実臨床の取り組みをご紹介します。新生児看護における感染管理の理論と、具体的な実践のイメージがつくものと考えます。本特集が「新生児にとっての最善につながる」感染管理について再考する一助となれば幸いです。

坂木晴世 Sakaki Haruyo

国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究所保健医療学専攻看護学分野、同大学成田病院感染制御部／
感染管理認定看護師、感染症看護専門看護師